

舞踊作品における「題名」の機能

高橋 柳・西 洋子

研究目的

舞踊作品における「題名」は、身体言語によるコミュニケーションとして成立する舞踊において、唯一文字、つまりは記号言語をもって、直接的に作者と鑑賞者とを接近させる機能を持っている。時間芸術とされる舞踊において、「題名」のみがその特性とは直接関わらず、踊られる以前も踊られた以後も、変化することなくして存在する作品の一部と言える。

一般的に舞踊作品の題名は、作者がなにを「題材」としてその作品に向かったのか、どういった「主題」を展開しようとしているかに密接に関連しているといわれる。

「題名」というのは演者の姿勢や動きはもちろんのこと、音楽や衣装、舞台装置、小道具、照明など、作品を構成するいろいろな要素のうち、鑑賞者が接する最初のものであり、作品にこめられた「題材」や「主題」を、上演以前に暗示して、鑑賞者の解釈を作者の本来の意図に近付けさせる働きを持っている。

一方、作品を創作する際の「題材」への興味や関心は、作者の発達段階での違いがあり、作品の上演形態でも変化することが考えられる。さらに創作の原動力とも言える「主題」は、年齢の他にも社会的、文化的背景などの影響を強く受けるといえる。本研究では、言葉、文字という形式的な体系を持つ「題名」から、これらを実証するための一つのアプローチとして、主旨の異なる2部門を持つ、全日本高校・大学ダンスフェスティバルに参加発表された作品の「題名」の分析を行い、作者の発達段階と共に、主旨の異なる2部門が作品創作に与える影響、2部門設置の意義について考察することを研究の目的とした。

研究方法

1. 第1回～第4回大会に出品された623作品の「題名」を以下に示す項目によって分類する。

- (1) 部門別参加状況の比較
- (2) 題名の内容に着目し「自然現象」「生活現象」「思想感情」「抽象」の4項目による分類を行う*
- (3) 題名の表記方法に着目し「漢字」「ひらがな」「カタカナ」「英語」「混合」の5項目による分類、及び題名の語数調査

結果と考察

全日本高校・大学ダンスフェスティバルは高校生・大学生を対象とした全国規模の大会である。

この大会は、創作コンクール部門と参加発表部門の2部門が設けられている。2部門の設置について、大会プログラムに記載されている主催者の主旨によれば、ダンス創作の限りなく高く、そして深い可能性に挑戦する創作コンクール部門と、より自由なダンス創作を行い多様な拡がりあるダンスへの挑戦を試みる参加発表部門とが垂直と水平の方向で調和をたもちつつ繰り広げられることが理想であるとしている。どちらの部門でも自由に参加でき、コンクール部門には文部大臣賞を始めとする賞が設けられている。

1. 参加状況

全日本高校・大学ダンスフェスティバルの参加グループ数は、回を追うごとに増加の傾向にある。(図1)

創作コンクール部門の高校生作品は、第1回大会から43, 52, 57, 61作品と毎回増加しており、大学生作品も46, 42, 46, 50作品と、2回大会以降は増加している。参加発表部門はコンクール部門に比べ顕著な伸びは見られないが、安定した参加がある。

またコンクール部門あるいは参加発表部門の一方のみに参加しているグループが存在することから益々の拡大が予想され、2部門の存在意義が大きいと考えられる。

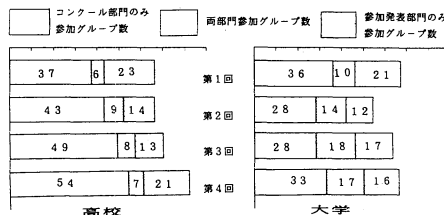


図1 参加状況

2. 題名の分析 一内容一

「題名」の内容に着目し分類を行った結果は図2の通りである。創作コンクール部門では生活現象、思想感情が32.3%、32.1%とほぼ同率で並び、自然現象29.4%抽象6.2%と続く。参加発表部門では生活現象が圧倒的に多く、思想感情が24.0%、自然現象が16.6%と、共にコンクール部門に比べ低率となっている。コンクール部門においては題名の選択が各領域にわたっており、イメージに合った「題材」「主題」を様々な言葉の中で模索している様子が伺われる。一方、参加発表部門では身近な所から「題名」を選び出す傾向があり、日常を気楽に表現することで自由なダンスへの挑戦となっている。これは創作コンクール部門と参加発表部門の主旨の違いの表れであると解釈できる。また視点を変えるとコンクール部門では他作品との競争があり、参加発表部門では発表

をするだけという、目的意識の違いからも「題名」の付け方に特徴が表れると推察されるが、この点については、今後の課題として検討して行きたい。

部門	自然現象	生活現象	思想感情	抽象
コンクール部門	29.4%	32.3%	32.1%	6.2%
参加発表部門	16.6%	49.8%	24.0%	9.6%

図2 題名の内容

3. 題名の分析

—表記方法・表記語数—注 *1松本の舞踊 題の分類方法による

図3は「題名」の表記方法をグラフにしたものである。両部門の間には顕著な差がみられた。コンクール部門では60%を占める漢字表記が参加発表部門では34.8%に止まり、一方英語表記は参加発表部門でコンクール部門の倍以上にも達した。カタカナ表記もまた参加発表部門で多く、混合・ひらがなは両部門ほぼ同率に並ぶ。漢字の特性として多様な意味を持ち、多様な読み方が可能である事が言える。「題名」を漢字表記することで、「主題」を多方面からとらえることが可能になり、作者のイメージにより近付けることができる。より高い可能性に取り組むコンクール作品で多く使われているのは、その特性を生かした結果であろう。

また、自由に作品を作り出す参加発表作品では、漢字表記は少なくなり、英語表記が多くなっている。これは参加発表部門の傾向として、ジャズダンスのジャンルが多く、そのほとんどは英語表記・カタカナ表記ということが一因と考えられる。

「題名」が幾つの語数から成っているかを調べたものが表記語数のグラフである。(図4)

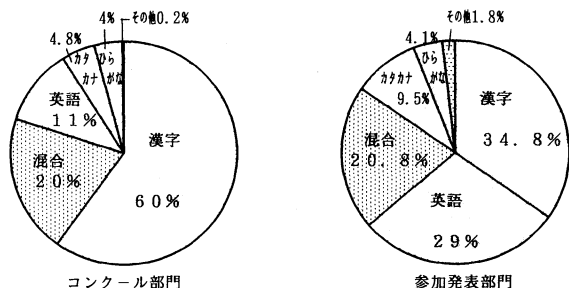


図3 題名の表記方法

コンクール部門の語数は半数近くが一語で表記されているのに対し、参加発表部門は複数表記の作品が多い。一語では表現できないイメージを、語の連合により表現したり、単に記号として用い、「題名」を視覚の中で強く印象づけようとする傾向は、参加発表部門の中に多く、また高校生より大学生作品にその傾向が強い。

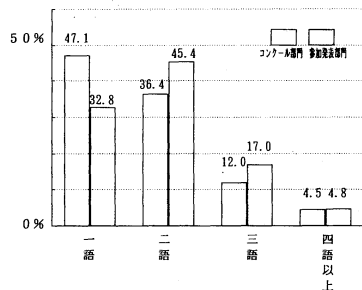


図4 題名の表記語数

まとめ

言うまでもなく、「題名」は舞踊作品の全てではなく一部分でしかありえない。しかし、私たちが舞踊作品を鑑賞するとき、作者の意図する「主題」を解釈する手掛かりとしてなくてはならないものである。

今回の分析結果から、「題名」の内容や表記方法、表記語数は、作者の発達段階、創作の目的により多様であることが実証された。これは舞踊作品の「主題」や「題材」の暗示としての「題名」の機能を、作者であり演者でもある高校生・大学生らが意識している結果と受けとれる。また、これらの結果から作品創作において見通すべき発達課題に対する指標も得ることができよう。

一方、全日本高校・大学ダンスフェスティバルの参加作品は、全体を通じて両部門の「題名」の傾向は明らかな違いを示していた。題名が「題材」の選択や「主題」の展開に深くかかわる点を考慮すると、「題名」の相違点はそのまま作品の質的な違いに繋がって行くと考えられる。この点から、主旨の異なるコンクール部門と参加発表部門の二部門を設置することの意義を見出すことができる。本研究は「題名」の記号言語のみからのアプローチであった。記号言語が量的な処理に適していると判断したからである。しかし題名が舞踊作品の全てでは有り得ない以上、記号言語のみの分析で作品の全てを理解するには限界があった。

また、両部門は主旨が異なるというだけではなく、コンクール部門には賞が設置され、参加発表部門は発表のみという、競うか競わないかの心理的状況が与える影響を考慮せず主旨の違いのみで2部門をとらえたことによる限界も認めないわけにはいかない。これからの課題としたい。